

システム論的自我論

カントとオートポイエーシス

山下和也

オートポイエーシス論は1970年代に神経生理学者ウンベルト・マトゥラーナとフランシスコ・ヴァレラが発案した最新のシステム論であるⁱ。オートポイエーシスは本来、マトゥラーナが生命を定義する概念として提案したもののだが、ニクラス・ルーマンによって社会学へと応用されて以来、自然科学のみならず、人文科学においても幅広く応用され、成果を上げている。例えば、法をオートポイエーシス・システムと見なす法学理論が唱えられているし、精神医学の家族療法の基礎理論としても適用されている。精神分裂病の理論や文学作品の解釈への応用すらある。哲学に関して言うと、マトゥラーナはオートポイエーシスの認識論も提案しているのだが、哲学者からはそれほど注目されておらず、オートポイエーシス論の哲学への応用はまだあまりないⁱⁱ。しかしながら、この理論は哲学的に見て非常に興味深い多くのテーマを含んでい

ⁱマトゥラーナによれば、彼が初めて「オートポイエーシス」という単語を使用したのは1972年のスペイン語で書かれた論文の中であり、マトゥラーナ単独の着想によるものであった。Vgl.

Maturana, Humberto: The Origin of the Theory of Autopoietic Systems, in: Fischer, Hans Rudi (Hrsg.): Autopoiesis: eine Theorie im Brennpunkt der Kritik, 2. korrigierte Aufl., Heidelberg, 1993 (1991-1. Aufl.), S.123

ⁱⁱ『判断力批判』の有機体論とオートポイエーシスを関連付ける研究がある。Rang, Bernhard: Zweckmäßigkeit, Zweckursächlichkeit und Ganzheitlichkeit in der organischen Natur. Zum Problem einer

る。ここでは特にその自我論に注目し、カントの自我論との比較を試みる。両者の間
にかなりの共通点があると思われるからである。そこで、カントの『純粹理性批判』
の統覚論と、カント最晩年の『オプス・ポストウム』における自己指定論をオート
ポイエーシス論の自我論との比較を通じて読みなおしてみたい。この比較を通じて、
新しい自我論の形を模索するのが本論の目的である。

1. オートポイエーシス

オートポイエーシス論はまだ完成したとは言えず、オートポイエーシス・システム
の絶対的な定義もまだ与えられていない。ここでは主に河本英夫氏に従って、最低限
の定式を描くにとどめる。オートポイエーシス・システムとは構成素を産出し、産出
された構成素が次の構成素の産出の継続を可能とするように作動していく産出プロセ
スのネットワークであるⁱⁱⁱ。より正確に言えば、システムの産出物のうちで次の産出に
関与するもののみがそのシステムの構成素となる。産出された構成素はシステムをみ
ずから決定する位相空間内の構造として実現し、それによってシステムが単位体とし
て存在する。マトゥラーナの言葉を借りれば、オートポイエーシス・システムとは、
構成素が構成素を産出するという産出(変形および破壊)過程のネットワークとして、
有機的に構成(単位体として規定)されたシステムである^{iv}。構成素は変換と相互作用
をつうじて、自己を産出するプロセス(関係)のネットワークを絶えず再生産し実現
するとともに、システムを空間に具体的な単位体として構成し、この空間内でネット
ワークが実現する位相的領域を特定することによって存在する。

teleologischen Naturauffassung in Kants Kritik der Urteilskraft, Philosophisches Jahrbuch 100, 1993, S.
39-71.

ⁱⁱⁱ例えば、細胞はそれを構成している高分子をみずから産出し続けることで存在しているオートポイ
エーシス・システムである。

^{iv}H. R. マトゥラーナ・F. J. ヴアレラ『オートポイエーシス』、河本英夫訳、国文社、1991年、
70頁以下を参照。

ある化学反応によって物質が産出され、この物質が何らかの化学反応を継続させ、産出された物質がさらに化学反応を継続させて、これが連続していくとするならば、化学反応の連鎖がシステム、産出されていく物質が構成素、外から観察可能な産出された物質の塊がシステムの構造になる。物質の産出を伴って反応の連鎖が続く限り、産出された物質に基づいて、この連鎖は存在しつづけている。つまり、オートポイエーシス・システムは作動することによってみずからを形成しつつ存在するのである。ルーマンによれば、「その限り、オートポイエーシスとはシステムのそれ自身による産出である」^v。構成素の産出システムと構成素の関係は私が私を産出するという仕方で自己言及的になっている。また、構成素の産出はシステムの作動のみに依存し、これをオートポイエーシス・システムの自律という。

ただし、システムは、ハンス・ルディ・フィッシャーが言うような、まるで無から有を生むような自己原因による自己創造をやっているわけではない^{vi}。構成素の産出とはすでに存在している何かを変形加工して構成素にするということに過ぎず、オートポイエーシス・システムがまったく外物から独立だというのは誤解である。先の化学反応の例で言えば、反応に先立って何らかの化学物質がなければ反応は生じないし、物質も産出されない。さらに言えば、システムは自己言及の論理的パラドックスともまったく無縁である。最初の自己の発生はその自己の働きによるものではないからである^{vii}。オートポイエーシスの本質は自己の発生プロセスと発生した自己の再産出プロセスにある。

定義にあるように、産出プロセスは互いに継続していれば、複雑なネットワークでもいい。つまり、さまざまな構成素の産出過程の複合が一つのオートポイエーシス・システムを構成していることもある。また、構成素が物理的実体である必要もない。ルーマンはコミュニケーションを構成素とする社会システムを論じている^{viii}。ヴァレ

^vLuhmann, Niklas: Die Gesellschaft der Gesellschaft 1, Frankfurt am Main, 1997, S. 97.

^{vi}Vgl. Fischer, Hans Rudi: Information, Kommunikation und Sprache, in: Fischer, a.a.O., S. 92.

^{vii}ルーマンがしばしば、自己言及をオートポイエーシスと同義に使うので、この誤解を招いたのであろう。

^{viii}ルーマンは、構成素がまったく持続せず、産出されると同時に消失していき、常に再生産され続けねばならないようなオートポイエーシス・システムを想定している。Vgl. Luhmann, Niklas: Soziale

ラはオートポイエーシスを生物以外に拡張することに反対しているが、この理論の強みは構成素の定義の柔軟性にあり、構成素になりうるものの範囲の広さが、その広範な応用の可能性を保証している。

構成素の産出プロセスの継続とこの構成素の産出そのものとは互いにまったく異質の過程であるが、同時に進行している。河本氏はこれを「二重作動」と呼ぶ^{ix}。ここで重要なことは、産出される構成素はシステムの部分でも要素でもないということである。システムは構成素を産出する働きのネットワークであり、いわゆる実体ではなく、産出された構成素およびそれによって実現している構造とは位相を異にする。オートポイエーシス・システムが単位体であるとは、システムが部分を持たず、それ以上分析不可能であることを意味する。ネットワーク的作動は部分に解体しようとするとうし失してしまうのである。

二重作動し続けるシステムがオートポイエーシス・システムと呼ばれるにはもう一つ条件がある。それは産出プロセスの連鎖がどこかでそれまでの産出プロセスの一つに回帰し、循環的に反復し続けることである。この際、まったく同じプロセスが反復し続ける必要はない。イメージとしては、その都度自分のそれまでの軌跡のどこかと交差するように曲がりながら走りつづけているという状態になる。複雑なネットワークを成している場合でも閉域は可能である。例えば、たくさんの矢印の先端と末尾をつなげるようにして、一本の矢印に複数が接続することを許せば、複雑なネットワークができ、両端が接続していない矢印をなくせば、全体が閉域となる。

オートポイエーシス・システムは再産出を反復することによって循環的に作動し、その都度他から区別される一つの閉域を形成するが、この閉域がシステムの自己である。言い換えれば、産出プロセスのネットワークがその都度反復されることによって作動に関して閉じて、自己完結した一つのものになり続けている状態である。先のイメージでは、走る軌跡がその都度描く輪がこれに相当する。

Systeme. Grundriß einer allgemeinen Theorie, Frankfurt am Main, 1999-7. Aufl. (1987-1. Aufl.), S. 28

^{ix}河本英夫「オートポイエーシスと二重作動」(現代思想臨時増刊号第29巻第3号『システム。生命論の未来』、青土社、2001年)、243頁を参照。

河本氏はこれをシステムそのものとしてのシステムの自己として、システムの「Sich」と呼ぶ^x。これは純粋に作動、機能としての自己であり、実体ではなく、システムの外からは観察できない。逆に言えば、オートポイエーシス・システムは観察者には依存しない自己同一性としての個性をもっている。当然、作動に先立って自己は存在しないし、逆に作動が続く限り、この自己は変化しながらも同一性を保って存在し続ける。これに対して、構成素が構成するシステムの構造は特定の、外から何らかの形で観察可能な現実体を形成するが、これはこのシステムのもう一つの自己、システムの構造の自己として、システムの「Selbst」と名付けられている。したがって、オートポイエーシス・システムには二重の自己があるわけである。

先にシステムの自己はシステムの外から観察できないと述べた。先に挙げた例では、化学反応そのものは我々には見えず、見えるのは産出される化学物質だけである。それではオートポイエーシス論はいかにして論じることができるのだろうか。簡単に言えば、システム自身の視点を取り、システムの作動を「それ自体で内的に直観するように」^{xi}描き出すのである。マトゥラーナはしばしばオートポイエーシス・システムを潜水艦に喩える。潜水艦の中で起きていることは、潜水艦の外から見たこととは、まったく異なっている。外から見れば、潜水艦の乗員は潜水艦を操縦しているのだが、潜水艦の乗員自身はそこにある装置を一定の手順で操作しているに過ぎない。このようにシステムの内部の、システムにとっての視点から、システムの作動をいわば追体験するように記述していくのがオートポイエーシス論なのである。

ルーマンはオートポイエーシス論の応用として意識論を展開している^{xii}。それによれば、意識はそれ自身の変容を構成素とするオートポイエーシス・システムである。ルーマンはこの変容を「思惟 (Gedanke)」と呼ぶ。「意識のオートポイエーシスは多

^x河本英夫『オートポイエーシスの拡張』、青土社、2000年、16頁を参照。

^{xi}河本、「オートポイエーシスと二重作動」、252頁。

^{xii}Luhmann, Niklas: Die Autopoiesis des Bewußtseins, in: Selbstthematization und Selbstzeugnis: Bekenntnis und Geständnis, hrsg. von Alois Hahn und Volker Kapp, Frankfurt am Main, 1987, S. 25-94.

かれ少なかれ明白な思惟の進行的紡ぎ出し（Fortspinnen）である。」^{xiii}意識システムはみずからを産出する操作から成っており、この産出が停止すれば消滅する。また、考えられたものと考えること、つまり思惟とその産出システムの操作である意識システムそのものは厳密に区別されねばならない。ルーマンは自分自身と区別されるものとして理解することを「観察（Beobachten）」と呼び、思惟によって思惟が観察されるとする。思惟は観察によって以前の思惟とは異なるものとなり、進行していく。ルーマンの術語では観察された思惟が表象である。すぐに理解されるとおり、表象の産出は自己関係性、正確に言えば同じ意識システムが産出したそれまでの思惟への関係を前提している。

重要なのは、意識における思惟は現れるとそのまま消失する出来事であって、一瞬たりとも留まらないということである。それぞれの思惟という出来事はそれまでの思惟を観察していることによるのみ同一性を保ちうるが、ここに循環的な再産出の回路が現れている。「おのおのの思惟は再帰的、オートポイエーシスの再産出連関のうちでのみその統一を獲得する。」^{xiv}だから、意識は自己同一的なものとして存在しうるためにはオートポイエーシス・システムでなければならないのである。

2. 統覚論とオートポイエーシス

ここでは『純粹理性批判』におけるカントの統覚論を、主として第二版の演繹論を中心にして分析していく。第二版の超越論的演繹はまず、感性を通じて与えられる多様な結合を、受容性である感性によっては与えられない「表象能力の自発性の活動（Aktus）」（B130）としての「綜合統一」と規定する。これは主観の自己活動性の活動であるがゆえに、綜合統一の分析は必然的に主観への問いを含む。

カントは綜合統一の主観を統覚と呼び、その活動を分析していく。まず、演繹論の第十六節で、「『私は...と考える』がすべての私の表象に伴うことができなければな

^{xiii}Luhmann, a.a.O., S. 31.

^{xiv}Luhmann, a.a.O., S. 35.

らない」(B131)と断言される。ある表象が私の内で思惟されうるためには、言い換えれば私の表象であるためには、「私は...と考える」がその表象に伴いなければならない。ということは、私のすべての表象は潜在的には「私は...と考える」という形の表象なのである。たとえば「すべての出来事は原因をもつ」という命題は「私は、すべての出来事は原因をもつと考える」という命題の省略形である。

この「私は...と考える」という表象は自発性の活動であり、経験的統覚と区別して純粹統覚と呼ばれ、また、他の表象から導出しえない同一的な「私は...と考える」という表象を生じさせる自己意識であるがゆえに、根源的統覚とも呼ばれる。ここに一つの循環がある。自己意識は「私は...と考える」という表象をみずから生み出している。つまり、この表象は自己意識の産物である。ところが、この表象の中に含まれる「私」もこの自己意識を指している。よって、この表象の産出に関わる循環は自己言及的な循環である。

また、カントは「私は...と考える」という表象の統一を自己意識の超越論的統一とも呼び、すべての私の表象が一つの自己意識に属さねばならないとする。これは、私の表象の産出プロセスが、「私は...と考える」の産出を反復するという仕方で、自己意識という一つの閉域を形成していることを意味する。活動である統覚の統一は単一的実体ではありえず、一まとまりを成す閉じた作動であるしかない。根源的統覚は「私は...と考える」という表象を自己言及的循環として継続的に反復して産出しつつ、活動の閉域としてみずからの単一性を保つのである。

これに対し、その都度の表象に伴うそれぞれの経験的意識はそれぞればらばらであるから、統覚の同一性はこれらの表象の総合の意識によってのみ可能となる。つまり、同一的なものとしての自己意識は、「私が所与表象の多様を一つの意識へと結合しうることによってのみ可能」(B133)なのである。私は直観において与えられた表象の多様に関して、こうした表象を私の表象と呼ぶことで、同一的自己を意識するが、これは「私が、統覚の根源的総合的統一と呼ばれ、その下にすべての私に与えられた表象が立つ、表象のアプリオリな必然的総合を意識しているということ」(B135)に他ならない。

つまり、自己の同一性は、したがって自他の区別も、根源的統覚の総合統一に基づいているのであり、根源的統覚という表象産出プロセスの閉域が成立しなければ、他

から区別される自己意識の同一性も維持されない。ヒュームが統一的自己の存在を否定し、「想像も及ばない速さで相互に継起し、恒久的な流れと運動の中にある、異なる知覚の束あるいは集合」^{xv}に過ぎないとするのは、意識現象の事実的な記述のみに専心し、種々の知覚を産出している統覚の活動の機能的な統一を見ないためである。その場合、カントの言うとおり、意識される知覚の数だけ異なる自己をもつことになってしまい、ヒューム自身が自己矛盾に陥ったごとく、もはや自己という概念さえ不可能となる。

ここで総合統一という活動とそれが産出する表象を明確に区別する必要がある。表象は「あれこれの時間関係における我々の心性（Gemüt）の内的諸規定」（B242）と定義され、また「心性の変容」という表現も用いられる。カント自身は明確に述べていないが、「私は...と考える」という表象は、この表象を産出している自己意識の超越論的統一という活動からは区別されねばならない。超越論的統覚は自己活動的実体ではなく活動そのものなのである。であるから、統覚は表象を産出し続けていなければ存続しえない。

まとめれば、超越論的統覚は「私は...と考える」という表象を自己言及的循環として反復的に継続して産出しつつ閉域を形成して単一性と自己同一性を維持する、言い換えれば単位体の自己として存在し続ける活動である。これは、この表象を構成素とすれば、オートポイエーシス・システムの定義をすべて満たしている。ルーマンで言えば、思惟が「私は...と考える」という表象に、意識システムが超越論的統覚に相当するわけである^{xvi}。「私は...と考える」という表象の産出と、この産出の反復継続が「二重作動」を成している。

実際、ルーマンは超越論的哲学そのものには「システム言及にすぎないものの誤っ

^{xv}Hume, David: A Treatise of Human Nature, edited, with an Analytical Index, by L. A. Selby-Bigge, Second Edition, with text revised and noted by P. H. Nidditch, Oxford, 1978, P. 252.

^{xvi}フリードリッヒ・ヴァルナーはカントにおける統覚の自発性をオートポイエーシス性に、受容性をアロポイエーシス性に対応するものと見ている。 Wallner, Friedrich: Selbstorganisation -Zirkularität als Erklärungsprinzip? in: Fischer, a.a.O., S. 42

た絶対化」^{xvii}として否定的であるが、逆に言えば、自分のシステム理論の意識への応用と見ていることになる。自己言及を意識の特性と見て、それゆえに意識を主観とすれば超越論主義になると、明確に述べている。ゲルハルト・ワグナーとハインツ・ツィプリアンは、ルーマンの自己言及と、まさに演繹論第十六節のカントの議論との近縁を指摘している^{xviii}。

カントが現実性を経験の質料的制約としての感覚への関連と定義しつつ、感覚や直観ではなく単なる意識である「『私は...と考える』が私の現存在を規定する活動を表現」(B157Anm.)し、それだけで私の現存在を与えることができると主張するのは、しばしば矛盾とされるが、システムが構成素を産出する限り存在するとするオートポイエーシス論から言えば不自然ではない。

超越論的統覚をオートポイエーシス・システムと考えると、なぜそれが経験的統覚から区別されるのかが明らかになる。カントは経験的統覚を内官とほぼ同一視しているが^{xix}、正確に言えば、内官によって我々自身に現象するように意識に提示されている我々が経験的統覚になろう。カントは「いかにして私が私にとってそもそも客観、それも直観と内的知覚の客観でありうるか」(B155f.)を論じており、この私にとって客観となった私が経験的統覚である。これは内的直観が総合統一されたものに他ならない。さて、前述したように、オートポイエーシス・システムは二重の自己、システムの自己とそれによって産出されるシステムの構造の自己を持つ。つまり、超越論的統覚がシステムの自己であるとすれば、それによってその都度産出される私の内的表象の総体である経験的統覚はシステムの構造の自己に相当するわけである。その都度の構造の自己同一性がシステムの自己同一性によって保証される点も、カントの議論と一致する。カントが経験的統覚と内官をほぼ同一視して受容性とするのは、産出された表象が産出するシステムから見て受動的な立場にあるからであろう。カントの言う自己触発とはまさに、この産出の働きに他ならない。

^{xvii}Luhmann, Soziale Systeme, S. 607

^{xviii}Vgl. Wagner, Gerhard/Zipprian, Heinz: Identität oder Differenz? Bemerkungen zu einer Aporie in Niklas Luhmanns Theorie selbstreferentieller Systeme, in: Zeitschrift für Soziologie, Jg. 21, Heft 6, Stuttgart, 1992, S. 399. ただし、ワグナーとツィプリアンはこれをもって、ルーマンのシステム論を否定しようとしている。これも、自己言及とオートポイエーシスの混同から来る誤解である。

^{xix}Vgl. A107.

3. 『オプス・ポストゥムム』の自己措定論

最晩年の『オプス・ポストゥムム』においてカントは、超越論的演繹のテーマをもう一度展開して「自己措定論」を論じている。そこでは、「主観が直観の多様の集合的統一において自分自身を措定する」(XX 44)、「それによって主観が自分自身を措定する我々自身の意識における表象の多様」(XX 47)といった表現が繰り返し用いられる。この自己措定はまた、主観がみずからをみずからの客観とすることとも規定されている。ここで主観と呼ばれているのは統覚である。「私自身の意識は、それによって主観が自分自身を客観とする同一性の、すなわち統覚の論理的活動である。」(XX 69)『純粹理性批判』の統覚論と比較すると、ここでは超越論的統覚の自発性が統覚自身へも向かうことがより強調されている。

そしてこの自己言及性は自己が自己となることそのものに関わってくる。カントははっきりと、「私は私自身を形成する」(XX 82)と述べる。自己言及的循環的な働きによる自己の形成という論点が演繹論より明確に打ち出されているのである。これは完全にオートポイエーシス論と一致している^{xx}。言うならば、カントは『純粹理性批判』の統覚論の趣旨を変更することなく、よりオートポイエーシス論に近い自己措定論を掲げているのである。アディッケスはここにフィヒテとベックの影響を見ているが、カント自身の思想の内発的發展と見ることも不可能ではない^{xxi}。

ここで注目されるのは、主観の自己活動に論理的自己活動と形而上学的自己活動が区別されることである。「表象能力は私自身の意識(統覚)から出発し、この活動は単に論理的で、それによっては主観によってまだいかなる対象も与えられない思惟の活動である。」(XX 79)また、「私は私自身を思惟するという活動は単に主観的である」(ibid.)とされ、さらに「私は思惟しつつ存在する」という命題は同一命題であるとして、デカルトの「我思う故に我あり」が否定される。つまり、主観の論理的

^{xx} ユルク・ミヒャエル・カストゥルは、カントではないが、フィヒテの自己措定論とルーマンのオートポイエーシス論の類似を指摘している。Vgl. Kastl, Jörg Michael: Die insgeheime Transzendenz der Autopoiesis. Zum Problem der Zeitlichkeit in Luhmanns Systemtheorie, in: Zeitschrift für Soziologie, Jg. 27, Heft 6, Stuttgart, 1998, S. 406f.

^{xxi} Vgl. Adickes, Erich: Kants Opus postumum, Berlin, 1920, S. 605.

自己活動は主観的で客観を与えないが、みずからの現存在は与えることができる^{xxii}。

これに対し、「主観がそれによって自分自身を客観とする活動は形而上学的である」(ibid.)、また、「意識の第一の総合的活動は主観がそれによって自分自身を直観の対象とする活動であり、同一性の規則によって論理的(分析的)でなく、形而上学的(総合的)である」(XX 85)とされる。カントはここで、主観が絶対的統一としてみずからを措定する論理的自己措定と、主観が自己触発によってみずからを直観の対象である現象として措定する形而上学的自己措定を区別している。前者が超越論的統覚を、後者が経験的統覚を措定することは言うまでもないが、『純粹理性批判』の議論に比して、自己措定がみずからを存続させつつ、客観として実現させる二重作動が明確になっている。

また、カントは明らかにこの両者の存在の仕方に差異を認めている。論理的自己措定は「私はある(ich bin)」というあり方であり、これは同時に「私は...である」という繫辞の機能をもっている。これに対して、形而上学的自己措定に対応するあり方は「私は実在する(ich existiere)」で、空間と時間における現象としての私の現存在を汎通的に規定する。『純粹理性批判』のパラロギスムスでは、「私は...と考える」という命題を始めにアプリアリであるとしながら、経験的命題と見なし、これと私の実在を「同一的」(B422Anm.)であるとするなど、表現に若干の混乱が見られるが、『オプス・ポストゥムム』では明瞭に整理されていると言える。

カントは『オプス・ポストゥムム』で、「私は私自身にとって私自身の概念によって対象である。[...]私は2. 私自身にとって思惟の一対象であると同時に内的直観の対象でもある」(XX 105)というように「私は私自身にとって」という表現を多用しているが、これもシステムをシステムにとっての立場から記述するオートポイエーシス論への接近を示すものと言える。

すでに『純粹理性批判』が、第一版の序文で、理性が「そのすべての仕事の中で最も困難な仕事、つまり自己認識という仕事」(AX)を引き受ける法廷とされている

^{xxii}アディッケスのようにこれを自己自体と理解すると、統覚と自己自体の区別が失われてしまう。

Vgl. Adickes, a.a.O., S. 636.

ように、批判哲学の自己言及性が意識されているが、自己認識がいかなる資格で為されるかは明確でない。批判哲学としての自己認識は、それが解明している、自己直観に基づく経験的自己認識とは明らかに異なるからである。批判哲学は、この「私は私自身にとって」という自己措定の自己言及性によってのみ、言い換えれば、システムのシステムにとっての立場からの記述としてのみ、その可能性を保証されうる。ここに、カントの自我論とオートポイエーシスの自我論の接近の根拠があると言えよう。

カントの認識論と比較するとき、オートポイエーシスの認識論がバークリ的なラディカル構成主義だとする解釈の誤りが明確になる^{xxiii}。確かに、オートポイエーシス論はシステムの自律を強調し、認識主観から独立な外界の客観的認識は承認しない。しかしながら、それは客観的外界の存在そのものを否定しているということではない。このような解釈は、カントの超越論的観念論を独断的観念論と見なす解釈が誤っているのと同じ理由で誤りである。カントが「観念論論駁」で、「私自身の現存在の単なる、しかし経験的に規定された意識は、私の外なる空間内の諸対象の現存在を証明する」(B275)としているように、オートポイエーシス・システムの存在はそれがそこで発生した外界の存在を証明してしまうのである^{xxiv}。

結語

ここまで見てきたように、カントの『純粋理性批判』における統覚論とオートポイエーシスの自我論は、表象という構成素の自己言及循環的産出の反復による意識システムの存在、超越論的統覚というシステムの自己と経験的統覚というシステムの構造の自己の二重性などの点で一致し、『オプス・ポストウムム』の自己措定論となるとその一致はさらに明確になる。

^{xxiii} フィッシャーはオートポイエーシスの認識論において、「我々は構成主義の生物学的に基礎付けられた一形式に関わる」とする。Fischer: *Murphys Geist oder die glücklich abhanden gekommene Welt. Zur Einführung in die Theorie autopoietischer Systeme*, in: Fischer, a.a.O., S. 29.

^{xxiv} システムが自分の外界を認識しうるかどうかは別の問題になる。オートポイエーシス論では、システムがそこから自分を分離した外部を環境と呼ぶ。

おそらくカントは、「対象ではなく、対象についての我々の認識の仕方」(B25)に関わるという超越論哲学を採用し、認識の主観の立場から認識の成立を記述するという方法を使ったことで、オートポイエーシス論の方法論に接近したものと考えられる。主観の自己批判である批判哲学は、オートポイエーシス論的な、システムにとっての視点からのみ可能である。カントの哲学をオートポイエーシスの視点から整理すれば、認知科学をも踏まえた新しい自我論が得られ、さらにはそれに基づく新しい認識論の形が見えてくることが予想される。現在、カントにおける空間と時間、感覚、触発、物自体、現象の超越論的観念性などの問題が、オートポイエーシス論の観点から明確化されるという希望のもとに研究を進めているが、これはこの論文の範囲を越える。

(摂南大学非常勤講師)

*本発表中、カントからの引用はアカデミー版の巻号とページ数で、『純粋理性批判』からの引用は第一版をA、第二版をBで示す。

